北一輝と法華思想（三）

――その著作にみる『法華経』と日蓮の影響について――

若林孝彦

一　はじめに
二　学生時代
三　『國體論及び純正社會主義』……以上前々号
四　『支那革命外史』
五　『日本改造法案大綱』……以上前号
六　『霊告日記』……以上本号
七　総括

六　『霊告日記』

本章では、「霊告」の初日である一九二九年四月二十七日から、北が二・二六事件に連座して処刑される一九三七年八月十九日までの約八年間を『霊告』を中心に考察する。（なお、「霊告」を引用する場合は、記載年月日が明らかであるので、引用頁は示さない。）

1　時代背景

この時代は、日本を含む全世界が第二次世界大戦へ向かって雪崩をうって突き進んでいった混乱と激動の時代で

あった。

一九二九年十月に始まったニューヨークの株価大暴落は、大恐慌を引き起こし、その影響は全世界に及んだ。ヨーロッパでは、ヒトラーが率いるナチス・ドイツがヴェルサイユ条約を無視して軍備拡大と領土の復活、侵略を図り、ファシスト党のムッソリーニが率いるイタリアもエチオピアを侵略した。

中国大陸では、一九三一年九月、関東軍が満洲事変を引き起こし、一九三二年三月には、傀儡国家「満洲国」が建国されたが、国際社会の批判を浴び、一九三三年三月、日本は国際連盟を脱退することとなった。一九三七年七月には盧溝橋事件が勃発し、これが日中戦争、さらには太平洋戦争へと拡大していくこととなる。

日本国内では、昭和恐慌によって経済は大幅に後退してデフレが進行し、特に農村の疲弊は甚だしいものとなった。このような暗い世情を背景にして、首相・浜口雄幸狙撃事件、血盟団事件、五・一五事件など、政治家や実業家、すなわち「君側の奸」に対する多くの暗殺事件や陸海軍将校によるクーデター未遂事件が頻発し、その背景には日蓮系教団の関係者が関わることも多かった。これら一連の事件の中で、最後の、そして最大のクーデター計画が、北が精神的指導者として関わったとされる一九三六年の二・二六事件であった。

北は、実際には数々の事件に直接関わることはなく、自宅に引き籠って『法華経』の読経に明け暮れる毎日を送っていたが、一方で、三井財閥などからは巨額の資金を受領していた。

私は三十四歳の時（筆者注：一九一六年）より法華経を信仰して居りますが、特に最近数年間は、外部との交際を避け、国体観念とか日本主義と言った様な思想問題の研究、又は之等の主義主張に対する批評等は全然避けて、只管法華経の読誦に専念して、其の奥義を極める為め全力を傾注して居りますが、併し乍ら其間にも、昭和七年

（一九三二年）三月頃日仏同盟に関する建白書及昭和十年（一九三五年）七月に対支投資に於ける日米財団の提議と題して、謄写刷印刷物を各数十部宛作成して、外務省陸海軍方面へ密かに送附したことがありますが、其他には外部との交渉は殆ど断って居ります。

（「二・二六事件　昭和十一年三月二日付、東京憲兵隊第一回聴取書」著作集３：四二七頁）

２　『霊告』の思想

『霊告』は奇怪な文書である。北自身が自筆で書いたことは間違いないとしても、それは神仏の「お告げ」とも、北の予言とも、日々の記録ともつかない、妖気を放つ鵺のような存在である。そもそも『霊告日記』という名称自体、松本健一が『北一輝　霊告日記』編集・刊行の際、それまでさまざまに呼ばれていたこの文書を、わかりやすくそう呼んだことに始まるのである。（松本「解説Ⅰ」霊告：三二四―三二七頁）

『霊告』研究の嚆矢ともいえる宮本盛太郎の「『北日記』について」の言葉を借りれば、

『北日記』は、昭和四年四月二七日から昭和一一年二月二八日までの期間にわたって書かれた、北一輝の日記であるが、言葉の通常の意味における日記とは趣きを異にする態のものである。もちろん、昭和一〇年一〇月六日に中野区桃園町の新居に移る（「十月六日、中野桃園ノ新居ニ移リ住ム」）、というような記事も存在するが、多くは、北や北夫人、大輝の見た夢、北夫人の霊告、神社仏閣参拝についての記述である。（宮本　一九七六：二頁）

この頃の北の日常生活は、松本健一によれば、以下のようなものであった。

北一輝は朝起きると、十時ごろまで誦経した。大正八年（一九一九）末に上海から帰国し、翌九年はじめに東京に戻って以来の習慣である。かれの法華経への信奉は大正五年からであるが、誦経の習慣はその三年後であり、しかもその誦経がかれ自身の霊的生活として生の中心にすえられるようになるのは、昭和のはじめごろからである。

（霊告：三二二頁）

このような状況の中で、「霊告」はだいたい次のような形でなされていたらしい。

北の誦経は、かれが「神仏檀」とよぶものにむかってなされた。その「神仏檀」は、左右に南無妙法蓮華経と墨書した白木牌をおき、中央に明治天皇像を据えたものである。

「神仏檀」のむかって左側には、東郷平八郎の書になる「八幡大菩薩」の掛け軸が下がっていた。（…中略…）

さて、北の「神仏檀」に南無妙法蓮華経と墨書した二つの白木牌が並べられていたのは、そのまえで北と妻のすず子が並んで誦経するためであった。すず子はその誦経の最中にいわゆる〈神がかり〉となり、何か訳のわからないことを口走り、また意味のわからない文字を書いた。それを、北が解釈・解読して文字に直したのが、北のいう「神仏言」にほかならない。それらの「神仏言」はほとんどがお告げの主の名が示されている。つまり、神仏もしくはある人物の霊が〈霊告〉を下した、というかたちで、それらの「神仏言」が北によって書き留められているわけだ。

（霊告：三二二―三二三頁）

しかし、単純に、「すず子がシャーマン（巫女）役で、北がプリースト（祭司）役（霊告：三二七頁）」としたり、

「〈霊告〉は、いくつかの証言にあるように、妻すず子が神がかりして言った言葉を北が聞き取り、文字に直したものだ（評伝Ⅳ：一九四頁）」としたりする考え方には異論が多い。

この日記で、夫人の霊告といわれるものも、大部分は―特に時事問題に関係の深いものは―北自身の見解を、きわめてカムフラージュをほどこした形で述べたものであろうと思われる。（宮本　一九七六：六頁）

〈霊告〉はカリスマ的な要素を持つ北の言葉にすぎないのではないか、という推測である。たとえば、西田税未亡人の初子が生前わたし（筆者注：松本）に語ってくれたところでは、「〈霊告〉を文字に直せるのは北先生だけで、しかも北先生がいなくなってから奥さんが神がかりしたことは一度もないんですよ。」というのだ。この西田初子の発言は、シャーマン役のすず子に対しての疑問とみることもできる。つまりそれは、プリーストがいなくなった途端にシャーマンの神がかり状態が消滅してしまう、ということの不思議である。このことは、もしかしたら、すず子が〈霊告〉を発するシャーマンだったというより、その〈霊告〉が北のカリスマ的な人格と独特な思想や夢想の産物だったという事実を語っているのかもしれない。（霊告：三二七―三二八頁）

とすれば、「霊告」は北自身の思想や意見、あるいは願望、期待、不安の表明、暗示と捉えることはきわめて合理的な考え方であり、決して見当はずれのことではないと考えられる。[17]

すず子に霊的能力があった（正確に表現すれば、北やすず子が自分たちに霊的能力があると信じていた）としても、「金解禁」に関する複数の「霊告」[18]や二・二六事件の青年将校に示した「霊告」[19]に典型的にみられるように、「霊

告」の内容には、現実の政治、経済や国際情勢に微妙に関連している場合があるのであって、そこには北自身の意志が働いていると考える方が自然である。

最初の「霊告」は、一九二九年四月二十七日付けのもので、以後も大体以下のような形式で示される。

四月二七日　朝　経
巨大ナル掌ノ中ニ文字
売国奴

この「霊告」の意味するところは、松本によれば、

昭和四年四月二十七日の朝、法華経を誦していると、〈霊告〉があった。それによると、「巨大ナル掌ノ中ニ文字」が現われて「売国奴」と記してあった、というほどの意味である。しかし、これだけでは何とも意味不明瞭なので、その記述は四月十六日からの共産党員の全国的大検挙、いわゆる四・一六事件をにらんでの〈霊告〉なのではないか、と脚註で仮りに推測したわけだ。[20]（霊告：三三四頁）

つまり、松本は、「霊告」といっても、突然何の脈絡もなく神仏や偉人の「お告げ」が現われるわけではなく、何らかの現実の事件や事実に触発された北自身の感想、意見、希望などが「霊告」という形で暗示、示唆されたのではないか、と述べ、次のように続けているのである。

その謎のような記述を通して、ロマン的革命家としての北一輝の蒼白な原像が黯々とした昭和史のなかに浮かび上がってくることは、間違いないだろう。北一輝はこの『霊告日記』におけるカリスマ的な言葉によって、昭和史という歴史的現実にするどく対峙しているのである。（霊告：三二二頁）

いずれにしても、『霊告』は、現在でも、アカデミズムの立場からはまともにとりあげられることのない「奇書」ではあるが、北と宗教との関係、北の宗教観の推移と最終的な到達点を考えるうえで欠かせない文書であり、この点に留意して考察することとしたい。[21]

3　『霊告』にみる宗教観

『霊告』は、ある意味で、その全編が宗教に彩られているといっても過言ではない。「霊告」すべてが、シャーマニズムにおけるシャーマンの「お告げ」とも考えられるからである。

それはともかく、仏教に直接関連するような「霊告」を、最初の年一九二九年の分からいくつか（すべて挙げていてはきりがないので）挙げてみる。

五月一四日　朝　経

順徳帝山陵道示サレ（ツギニ）

日蓮上人辻堂ノ跡。藁ヲシキ笠ヲカブリ居ル。黒イ数珠ヲカケ合掌ス。雪ニ埋モラレ居ル上ニ五色ノ雲。白玉、御膝ノ傍ニ在リ。（筆者注：すず子が北に佐渡旅行の報告をしたことに関連すると思われる。）

同日（筆者注：五月三十日）　夜　浅草寺
悲体戒雷震
六月一日　朝　経
背面裸体禅定ノ仏。両肩割れ、左ニ四月三日、右ニ六月一日。割目ヨリ纒出テ手首見ユ。
六月一四日　朝　経
弥勒出現（文字上ヨリ下ニ下リツ、消ユ）
七月六日　朝　経
善哉善哉（後頭ヲ撫デラルヽ）
八月二八日　朝　経
下方ヨリ不動明王ノ御姿現ハレ悪人ノ罪
同日（筆者注：八月三一日）　夜　颱風ヲ退クル祈願、浅草寺参拝
観世音菩薩ノ御姿、左手ニ「風」ノ字ヲ握ラルル
一〇月一日　朝　経
獄窓、小川平吉氏ノ悄然タル顔、格子ノ外ヨリ法華経ヲ入ル。
一〇月三日　朝　経
因縁
慈意妙大雲
同日（筆者注：一〇月一三日）　夜　経

故大隈重信ノ顔
衆怨悉退散
一〇月一八日　午後　経
獄中、小川氏ノ顔、法華経ヲ開キ居ル。提婆達多品第十二ト、ハッキリ見ユ。
一〇月二五日　朝　経
仏力
秘密
秘密神通
閻魔大王ノ帳簿ヲ繰リ開キ居ル。人ハ居ラズ。
一一月二八日　午　経
大ナル指にて指し示す。文字、
念念勿生疑

『霊告』に登場する神仏は実に様々である。
仏教関係では日蓮、弥勒、不動明王、観世音菩薩、大日如来、弘法大師、釈迦牟尼仏、達摩、千手観音、勢多迦童子、等が書かれている。
「真言秘密神通力」、「普賢神通力」も頻出する。
この「普賢神通力」とは、『法華経』「普賢菩薩勧発品第二十八」で説かれる普賢菩薩の神通力のことであって、

普賢菩薩は釈尊に対し、神通力によって仏滅後も『法華経』を護り流布させ、経典を受持する者をも護ることを誓うのである。

七月六日の「霊告」も、「普賢菩薩勧発品第二十八」の釈尊の言葉「善哉善哉。普賢。汝能護助是経。（…中略…）当知是人。為釈迦牟尼仏。手摩其頭」「善い哉、善い哉、普賢よ。汝は能くこの経を護り助けて、（…中略…）当に知るべし、この人は釈迦牟尼仏の手にて、その頭を摩でらるることを為んと。（法華経・下：三三〇頁）」に基づくものである。

「法華経の使徒」を自認する北は、自分に迫る何らかの危険から、普賢菩薩が護ってくれること、釈尊が自分を褒めてくれることを夢想していたのであろうか。

また、五月三〇日と一〇月三日の「霊告」は二つで一組になっている。「観世音菩薩普門品第二十五」の釈尊の無尽意菩薩に対する答の偈「悲体戒雷震　慈意妙大雲」「（観音の）悲の体たる戒は雷の震うがごとく　慈みの意は妙えなる大雲のごとし（法華経・下：二六六頁）」によるものである。

続く一〇月一三日の「衆怨悉退散」「衆の怨は悉く退散せん。（法華経・下：二六六頁）」も、「悲体戒雷震　慈意妙大雲」のすぐ後に続く経文である。

さらに、一一月二八日の「念念勿生疑」「念念に疑を生ずること勿れ（法華経・下：二六六頁）」も同様である。「念念勿生疑」、「衆怨悉退散」、「悲体戒雷震」、「念被観音力」、「観音妙智力」など「観世音菩薩普門品」の偈からの引用は、一九三〇年以降の「霊告」にも頻出している。妻すず子は観音信仰を持っていたとの証言もあり、[22] あるいは、北が毎日読経した『法華経』とは「観音経」が中心だったのかもしれない。

一方、神道関係では、弓矢八幡大菩薩、金毘羅大権現、鹿嶋神宮、香取神宮、伊勢神宮、等々がある。

また、数は少ないが、キリストも十字架も登場している。

藤巻一保の『霊告』の検証によれば、北の神社、仏閣、御陵への年別参拝は以下のとおりである。（藤巻二〇〇五：二二九―二三六頁）

一九二九年　十五回（最多は浅草寺六回）
一九三〇年　二十一回（最多は浅草寺十回、川崎大師四回）
一九三一年　六回（最多は浅草寺、明治神宮、各二回）
一九三二年　二十回（浅草寺は三回に激減、東海～近畿の社寺が登場）
一九三三年　四十九回（関東～近畿の幅広い社寺、御陵や皇室関連神社）
一九三四年　八十三回（最多は白鬚明神二十三回）

藤巻の検証は、一九三四年で終わっているが、筆者が『霊告』を検証したところ、一九三五年は五十二回（最多は白鬚明神十五回、浅草寺十三回）であった。

この時期の、北の神社、仏閣等への参拝で注目したいのは、日蓮宗関係の寺への参拝が極めて少ないことである。

翌五年（一九三〇年）には、二十一回の参拝記録がある。（…中略…）日蓮宗関係の寺院としては、中山法華経寺が一回あるのみである。この年にかぎらず、北は日蓮宗系の寺には、ほとんど詣でていない。北に、日蓮個人や、日蓮宗の教義に対する特別な信仰がなかったことが、これで知れる。（藤巻、二〇〇五：二三〇頁）

『霊告』をみる限り、北はほとんど毎日のように『法華経』を読誦しており、一見すると『法華経』への傾倒は続いているようにみえる。しかし、北が心の奥底から『法華経』に帰依し、日蓮に傾倒しているかといえば、とてもそうはいえないであろう。『法華経』読誦は、「霊告」を引き出すための手段とも考えられ、この時期の北の信仰は、よくいえば「神仏習合」、悪くいえば支離滅裂な神仏頼みであって、『外史』にみられるような『法華経』の精神に基づく中国革命の成就といった強烈な意気込みは感じられないのである。

北は、一九三六年二月二十八日午後四時頃、東京憲兵隊によって、自宅で逮捕、拘引される（評伝Ⅴ：八〇頁）のであるが、最後の「霊告」（午後一時　祈願　大海ノ波打ツ如シ）はその直前の午後一時になされている。

4　遺　書

逮捕後、北は処刑される日までの約一年半を、代々木の陸軍刑務所（現在の渋谷区役所の辺り）で過ごすことになる。その獄中生活の中心は、『法華経』の読誦であった。

死の直前の北の宗教観を考えるうえで、処刑前日の一九三七年八月十八日に書かれた息子大輝宛ての「遺書」は、欠かすことができない重要な文書である。この「遺書」は、本論第二章に述べたように、北が一九一六年一月佐渡から取寄せて以来、上海でも東京でも獄内でも肌身離さず、二十年以上にわたって読経したというあの『法華経』経巻の裏に書かれているからである。全文を引用する。

大輝ヨ。此ノ経典ハ汝ノ知ル如ク、父ノ刑死スル迄読誦セル者ナリ。

汝ノ生ルルト符節ヲ合スル如ク突然トシテ父ハ霊魂ヲ見神仏ヲ見此ノ法華経ヲ誦持スルニ至レルナリ。即チ汝ノ

生ル、トヨリ父ノ臨終マデ読誦セラレタル至重至尊ノ経典ナリ。父ハ只此ノ法華経ヲノミ汝ニ残ス。父ノ想ヒ出サルル時、父ノ恋シキ時、汝ノ行路ニ於テ悲シキ時、迷ヘル時、怨ミ怒リ悩ム時、又楽シキ嬉シキ時、此ノ経典ヲ前ニシテ南無妙法蓮華経ト唱ヘ念セヨ。然ラバ神霊ノ父、直ニ汝ノ為メニ諸神諸仏ニ祈願シテ、汝ノ求ムル所ヲ満足セシムベシ。

経典ヲ読誦シ解説スルヲ得ルノ時来ラバ父カ二十余年間為セシ如ク誦経三昧ヲ以テ生活ノ根本義トセヨ。即チ其ノ生活ノ如何ヲ問ハス汝ノ父ヲ見父ト共ニ活キ而シテ諸神諸仏ノ加護指導ノ下ニ在ルヲ得ベシ。父ハ汝ニ何物ヲモ残サズ而モ此ノ無上最尊ノ宝珠ヲ留ムル者ナリ。

昭和十二年八月十八日　父　一輝

（評伝Ⅴ：一三九―一四〇頁）

また、翌八月十九日、刑死する朝、看守兵に与えた書には、次のように書かれてあった。

獄裏読誦ス妙法蓮華経、或ハ加護ヲ拝謝シ或ハ血涙ニ泣ク、迷界ノ凡夫古人亦斯クノ如キ乎

八月十九日　北　一輝

（著作集３：五三一頁、評伝Ⅴ：一二八頁）

これらを読むと、獄中の北は「霊告」生活から離れ、再び『法華経』中心の世界に戻っていったようにもみえる。事実、処刑前日、息子の大輝と北が「お父さん」とよぶ黒沢次郎（一八七四―一九五三）、北の門下生の馬場園義馬との面会の際、北は以下のような言葉を述べたという。（馬場園義馬「北一輝先生の面影」『新勢力』一九六五年二月号掲載、評伝Ⅴ：一四三頁）

お父サン（筆者注：黒沢）には是れから益々神信心をなさって誦経に専念して安らかに送られますように……。いろいろ刑務所で考へたのですが、どうしても此の世の中は最後は宗教でなければ治りませんよ。

（評伝Ⅴ：一三〇頁）

私は最う肉体は必要はない。今後は霊界に行って霊界から諸君を見守って、諸君を激励し、諸君を指導するから、皆なも其の意向でしつかり行り給へ。

（評伝Ⅴ：一三一頁）

一方で、北と代々木陸軍刑務所で半年間一緒だった島野三郎は次のように述べている。

刑務所内で北さんから、マホメットについて語れという注文があったので、マホメットはアラビヤの親鸞である、彼は、自分は罪業甚深の凡夫である。どうかアラー（神）の本願によって極楽往生ができますようと祈って死んでいった、と返事したところ、「アラビヤの親鸞」とは面白いね、という言葉が返ってきました。（「座談会　北一輝を語る」宮本　一九七六：三〇四頁）

『法華経』の世界に戻ったといっても、決して『法華経』一辺倒だったわけではなく、かつて執筆した『外史』や『法案』の頃と同様、様々な宗教への関心を失うことはなかったのだと考えられる。

5　まとめ

「霊告」の根源である北の霊感は、何に由来するのであろうか。弟の昤吉は次のように述べている。

兄がどうして霊感的人格となつたかといへば、既に幼少の時から、その萌芽があった。妙な夢を見て恐れたり、夜分何物かの幻覚を生じて、気味悪るがつてゐた。（「兄北一輝を語る」宮本一九七六：二四八―二四九頁）

北自身、『外史』のなかで、暗殺された宋教仁が亡霊となって北の枕頭の現れた経験を語っている。

亡霊一夜まざまざと枕頭に起ちし翌る日、不肖は秘密の所在を発見したり。（…中略…）
霊前に別を告げんとして至るや、讐を報ずるの日を待てと思ふと共にハラハラと落涙せし、昨日のこと。―而して思ひは廻りて幻の如く枕頭に立ちし亡霊の不可思議に帰りつゝ。（著作集２：一三九―一四〇頁）

この霊感とカリスマ的性格に、若い頃に得た膨大な知識が総合されたところに北の基本的な人物像があると考えられる。大川周明が北のことを評して「魔王」と呼んだ（評伝Ⅲ：二二二頁）というのは、このことを示しているのであろう。

その「魔王」が編みだした日々の「霊告」の記載内容は、一読した限りでは、確かに荒唐無稽、支離滅裂であり、北の意図を推測したり、何らかの意味を読みとったりすることは、無意味な作業のようにも思える。

しかし、「霊告」の内容を冷静に考えてみると、曖昧で微かではあっても、北の意志を感じることができるのではないだろうか。

例えば、最初の「霊告」に出てくる「売国奴」は、それが共産党員を意味するか、田中義一首相をさすのかは別

にして、北の「売国奴」に対する否定的な意志を象徴しているのではないだろうか。頻出する「用心せよ、注意せよ、油断するな」という趣旨の「霊告」は、北の周囲で密かに進行している何らかの計画に対する警鐘とは考えられないだろうか。「普賢神通力」の「霊告」があるということは、何かの力が北を攻撃しようとしている、と北が考えていたことを意味するのではないだろうか。

では、「霊告」の源泉となった北の思想、意志とは何か。

それは、革命への情熱以外には考えられない。確かに、『外史』や『法案』を執筆した時と比べれば、北の「革命」に対する直接的な情熱は薄れ、濁り、沈潜したものになっている。しかし、死してなお、「諸君を激励し、諸君を指導する」ということは、まだ、北の革命への情熱がくすぶりつづけていることを意味しているのではないだろうか。

法律的な意味では、北に二・二六事件の刑事責任があったとは到底いえないであろう。しかし、精神的にはやはり北は革命を企図していたのである。その精神が、「霊告」を表出させ、時には新興宗教の教祖のように、その「霊告」を青年将校たちに告げていたのである。

中国革命では精神的原理であったはずの『法華経』は、日本革命ではその地位を失い、北に残されたものは、残り火のような革命への情熱だけだったのかもしれない。北を師と仰ぎ、革命を叫ぶ青年将校たちも、『国体論』、『外史』、『法案』で意図した北の真意を理解する者はほとんどいなかったようである。晩年の北にとって、『法華経』は単なる形式であり、数ある宗教の中にあって、なじみ深い毎日の習慣と化していたのではないだろうか。

七　総　括

1　北は日蓮主義者か

本論冒頭で述べたように、従来の北一輝研究は、政治思想の立場からであれ、仏教の立場からであれ、「日蓮主義」、『法華経』が強調されすぎたのではないだろうか。

その大きな原因として、北が日蓮流謫の地佐渡に生を受けたこと、母の生家から日蓮ゆかりとも伝えられる『法華経』を受け継いだことがあげられるが、これらはなかばロマンチックな伝説と化して、学界においても無批判に受け入れられてきたのである。

そもそも「日蓮主義」という言葉は、田中智学の造語であるとされ、田中自身によりその定義がなされている。

「日蓮主義」は一九〇一年（明治三四）五月六日に発行された立正安国会の機関誌『妙宗』四編五号に付録として掲載された智学の「宗門の維新［総論］」において、はじめて用いられた。（…中略…）

では、最初に智学の定義から確認していこう。

「宗教並にいへば日蓮宗といひ、所依の経に就ては『法華宗』とも称し来ッたのだが、純信仰の立場よりも広い意味に、思想的又は生活意識の上にまで用ひようとして、之を一般化して日蓮主義と呼做したのである。」

智学にとって「日蓮主義」とは、「政治であれ、経済であれ、社会でも人事でも、凡そ人間世会のすべての事に正しい動力となッて実際の益を興す」「一切に亘る指導原理」であり、寺院や仏壇の中に封じ込めておくべきものではなく、世間を率いる「活指南」であった。（大谷二〇〇一：一五―一六頁）

また、本多日生（一八六七―一九三一）も、田中智学にわずかに遅れて「日蓮主義」という言葉を使い、広めていったとされる。

日生は『日蓮主義』という著作でこう断言する。日生にとって、「個人と云ふ事と、家庭と云ふ事と、国家と云ふ事と、世界と云ふ事と、宇宙と云ふやうな事は之を統一して見なければなら」ず、「どんなものでも皆な開顕統一してしまふ」のが「日蓮主義」であった。また「日蓮主義」の依拠する根本経典『法華経』は、「単に宗教的信仰許りを教ふるのではな」く、「人間の全生活、精神も肉体も道徳政治経済一切生まれてから死ぬ迄の全生活を全ふせしめて行く教」であった。（大谷二〇〇一：一七頁）

つまり、「日蓮主義」とは、あたかもイスラム社会において、コーランとハディースが、信仰だけではなく、政治、法律、経済、家庭をも含めた全生活、全人生、全社会を規定するように、『法華経』が全生活、全人生、全社会を規定するという思想なのである。こう考えると、『外史』や『法案』において、北が『法華経』をコーランに喩えた意味が理解できるような気がする。

たしかに、北は、中国革命を指導する宗教原理は『法華経』だと力説してはいる。しかし、それは革命を成功に導くための手段＝方便だったのではないだろうか。なぜなら、北は『外史』や『法案』において、『法華経』が革命後の中国や日本の社会を指導する原理だということは、明確には何もいっていないからである。

また、北の『法華経』への傾倒が、国柱会などの既存の日蓮系の組織とはまったく隔絶したところでなされてい

たことにも注目しなければならない。

高山樗牛、石原莞爾、宮沢賢治をはじめとする明治、大正時代の多くの『法華経』信者、日蓮主義者たちが、田中智学及び彼の主宰する国柱会から何らかの影響を受けていたことを考えると、彼らとまったく無関係に、北が独自の『法華経』信仰を深めていったことは、大きな特徴だと考える必要がある。これだけ見事に無関係であることは、たまたまそうなったのではなく、むしろ意識的に接触しなかったと考えるべきかもしれない。

北が、政治体制の変革＝革命をめざし、一部の政治家とはかなり親しい関係にあったにもかかわらず、自身は既存の政党や政治組織からは離れ、むしろ軽蔑さえしていたのと同様に、日蓮には強いシンパシーを覚えながらも、既存の日蓮系の組織には目を向けることはなかったのである。

以上のことから、私は、北が日蓮主義者であるとはいえない、と考えている。

2　北と『法華経』

北が、一九一六年以降『法華経』に傾倒し、さらには狂信的ともいえる『法華経』信者になっていったのは、まぎれもない事実である。しかし、北にとっての『法華経』は、世間一般に考えられる理解とはかけはなれたものであった。

『法華経』の正統的な教義は、①　一乗主義、②　久遠実成の仏、③　菩薩行、の三つであるとされている。北の場合、『法華経』の読経に熟達することが、必ずしも『法華経』教義の正統的な理解へとつながっていないことは、既にみてきたとおりである。

しいていえば、菩薩行が北の『法華経』理解なのかもしれないが、その菩薩行がめざすところは『法華経』の受持、弘通ではなく、革命の成就であり、「地涌の菩薩」とは「革命の戦士」の意であった。

『外史』や『法案』で引用される『法華経』の経文も、ほとんどがレトリックとして使われたのであって、『法華

経』の正統的な教義に基づくものは見当たらないのである。

北が、『法華経』を信仰していたことは間違いないだろう。しかし、『法華経』の読誦に時間を費やし、著作に経文をたびたび引用していたとしても、それは、北独自の理解に基づくものであった。

3　北の宗教観の推移

本論では、宗教、特に『法華経』を中心軸として、北の生涯を概観してきた。最後に、北の著作に基づいた時代区分にそって、その宗教観の推移を要約してみたい。

i　学生時代

a　北が、日蓮流謫の地、佐渡に生まれ育ったことや、母親の実家の宗旨が日蓮宗であったことから、幼いころから『法華経』や日蓮に親しんできたというのは、伝説にすぎない。

b　北が生涯身近においた『法華経』の経典が、日蓮または日朗にゆかりがあるというのも、事実に反するまったくの虚構、伝説であると考えられる。

ii　『国体論』

a　北は学生時代に、最新の仏教学や宗教学に基づく著作を読んでいた可能性があり、それが『国体論』の文章に反映していると考えられる。

b　しかし、それは学問、知識としての仏教、宗教であり、『法華経』も含めて特定の宗教への信仰はまったく認められない。

iii　『外史』

a　北が『法華経』の読経にふけるようになったのは、この頃からであり、これが刑死するまで続く。

b　『外史』には、『法華経』の影響が明らかにみられる。それは、中国革命は『法華経』を精神的原理として達成されなければならないという、北の信念であった。

c　しかし、その「北の信念」というものさえ、北が実際に中国革命に参加した時に持っていた訳ではなく、後に『外史』後半を執筆するときになって、後付けで付け加えられたものである。

d　北の『法華経』理解は、正統的な教義に基づくものではなく、「地涌の菩薩」を「革命の戦士」とするようなまったく独自のものであった。

e　北の宗教への関心は、キリスト教、イスラム教まで含む広いものであり、これは終生続いた。

iv　『法案』

a　中国革命では『法華経』を精神的原理と考えていた北だったが、日本革命においてはそれが消失している。

b　『法案』には「信教の自由」に関する規定はなく、日蓮主義者なら当然規定すべき『法華経』の国教化に関する規定もない。

c　『法案』には、『法華経』からの引用が多いが、ほとんどすべてがレトリックとしての引用であり、正統的な教義からはほど遠いものである。

v　『霊告』

a　雑多な宗教が混在する「霊告」は、北が生まれ持った霊感と称するものにその源があると考えられるが、その内容は現実におきている事実に関連したものであると考えられる。

b　北は青年将校たちに対し、教祖のようにふるまっていた。

c　獄中では、『法華経』の読経に回帰したようにみえるが、宗教に関する広い関心は失わなかった。

註

(17) 一方で、このような「合理的な見方」に対する反論は、現在でも主張されている。藤巻一保は、以下のように述べている。

「北の研究者のなかには、すず子の神憑りは謀略を当局からカモフラージュするための北の偽装で、すず子はダシに使われたにすぎないというがった見方をする者もいる。しかし、これはあまりにも宗教的な心理に疎い、皮相な見方だ。」(藤巻　二〇〇五：七四頁)「霊告は北が陰謀隠しのために利用した隠れ蓑で、すず子はダシに使われただけだとする「合理的な見方」の非合理さが、明らかになると思う。北とすず子は、本気で霊界を信じ、自分たちは神仏・心霊との交流ができると信じていた。それを前提に『霊告日記』を読まないと、合理的解釈という落とし穴にはまり、霊告の意味をねじ曲げてしまうおそれがある。」(藤巻　二〇〇五：一一一頁)

(18) 金解禁に言及する「霊告」には、以下のようなものがある。(霊告：三六―四九頁)

(一九二九年)　一二月一七日　朝　経　国恥の愚者(消エテ)金解禁時期ニ非ラズ　人で無し

(一九三〇年)　一月七日　朝　経　我ガ国柱無シ、国内顧ミズ、何ヲ以テ金解禁カ。　昭和七年時機。

三月二七日　朝　経　内外多難　金解禁重大なり(消)　大日本帝国なり　種臣

(19) 二・二六事件の中心人物の一人であった村中孝次大尉が、事件の前々日である二月二十四日、北宅を訪れ、そこで「蹶起趣意書」を清書した際、北に天皇のほうは大丈夫だろうか、と質問したのに対し、北は「大内山光射ス　暗雲無シ」という「霊告」を与えた。(評伝Ⅴ：一八二頁)

(20) 藤巻は、「筆者にはこの「売国奴」が、当時の田中義一首相をさしたもののように思えてならない。(藤巻　二〇〇五：一一一頁)」とする。

(21) 藤巻は、『霊告』について、以下のように述べている。

「北の思想や信仰、その人物を探るうえで、本書は絶対に欠かすことのできない根本資料といってよい。そのことは、以下の霊告を中心とした昭和四～十一年史で明らかにしていくつもりだが、この重要な日記が『北一輝著作集』にも収録されず、ほとんど等閑視されてきたという実状に、社会思想などの思想面に偏向した従来の北研究の片肺飛行ぶりが、端的にあらわれている。

戦後、宮本盛太郎らによりそのごく一部が紹介されてきたが、昭和六十二年に松本健一が編集・校訂をほどこして『北一輝　霊告日記』(第三文明社)の出版を実現するまで、日記そのものの行方が杳として知れず、幻の日記という状態が長くつづいてきた。(藤巻　二〇〇五：一〇一頁)

(22) 北の猶存社時代からの友人であり弟分であった島野三郎(一八九三―一九八二)は、「座談会　北一輝を語る」で以下の

ように発言している。

「北さんは、奥さんの不思議な感受力に内心恐れを抱いておられたようです。だからこそ、観音信仰の奥さんのいいなりに応接室に「念被観音力」と書いた横額をかけ、日夕拝んでおられたのです。」（宮本　一九七六：三一七頁）

参考文献

1　北一輝の著作

『北一輝著作集　第一巻』みすず書房、一九五九。
『北一輝著作集　第二巻』みすず書房、一九五九。
『北一輝著作集　第三巻』みすず書房、一九七二。（以上3冊は（著作集1～3）と表記する。）
『日本改造法案大綱』中央公論新社〈中公文庫〉、二〇一四。
松本健一編『北一輝　霊告日記』第三文明社、一九八七。（〈霊告〉と表記する。）

2　北一輝に関する研究

稲邊小二郎『一輝と昷吉　北兄弟の相剋』新潟日報事業社、二〇〇二。
清水元『北一輝　もう一つの「明治国家」を求めて』日本経済新聞社、二〇一二。
田中惣五郎『北一輝　日本的ファシストの象徴』未来社、一九五九。
高橋康雄『北一輝と法華経』第三文明社〈レグルス文庫〉、一九七六。
萩原稔『北一輝の「革命」と「アジア」』ミネルヴァ書房、二〇一一。
藤巻一保『魔王と呼ばれた男　北一輝』柏書房、二〇〇五。
前川亨「『支那革命外史』からみた中国革命と日本ファシズム」『東洋文化研究所紀要第一三一冊』東京大学東洋文化研究所、一九九六。
松本健一『北一輝論』講談社〈講談社学術文庫〉、一九九六。
松本健一『評伝　北一輝　Ⅰ　若き北一輝』岩波書店、二〇〇四。
松本健一『評伝　北一輝　Ⅱ　明治国体論に抗して』岩波書店、二〇〇四。
松本健一『評伝　北一輝　Ⅲ　中国ナショナリズムのただなかへ』岩波書店、二〇〇四。
松本健一『評伝　北一輝　Ⅳ　二・二六事件へ』岩波書店、二〇〇四。
松本健一『評伝　北一輝　Ⅴ　北一輝伝説』岩波書店、二〇〇四。（以上『評伝　北一輝』五冊は、（評伝Ⅰ～Ⅴ）と表記する。）

宮本盛太郎（編）『北一輝の人間像』有斐閣〈有斐閣選書〉、一九七六。
渡辺京二『北一輝』筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、二〇〇七。

3　法華経及び仏教学関係の著作

大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法藏館、二〇〇一。
大谷栄一『近代仏教という視座』ぺりかん社、二〇一二。
菅野博史『法華経入門』岩波書店〈岩波新書〉、二〇〇一。
北川前肇（編）『原文対訳　立正安国論』大東出版社、一九九九。
小松邦彰（編）『ビギナーズ日本の思想　日蓮「立正安国論」「開目抄」』角川学芸出版〈角川ソフィア文庫〉、二〇一〇。
坂本幸男、岩本裕（訳注）『法華経（上・中・下）』岩波書店〈ワイド版岩波文庫〉、一九九一。
（以上『法華経』3冊は、（法華経・上、中、下）と表記する。）
末木文美士『日本宗教史』岩波書店〈岩波新書〉、二〇〇六。
田村芳朗『法華経』中央公論社〈中公新書〉、一九六九。
中濃教篤「『日蓮主義』の左派と右派」『現代思想　特集＝日蓮』青土社、一九八二年四月。
西山茂（編）『シリーズ日蓮4　近現代の法華運動と在家教団』春秋社、二〇一四。
松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想史的展開』東京大学出版会、二〇〇五。

4　その他

江口圭一『体系日本の歴史14　二つの大戦』小学館、一九八九。
坂野潤治『体系日本の歴史13　近代日本の出発』小学館、一九八九。
坂野潤治『明治デモクラシー』岩波書店〈岩波新書〉、二〇〇五。
山口　定『ファシズム』岩波書店〈岩波現代文庫〉、二〇〇六。